

俳諧故人續五百題

上

829-3



俳諧資料カ一ド

年代	文政己丑
編者 (筆者)	一具
書名	俳諧故人續
備考	五百題上

(下垣内蔵)

近藤伴七藤原

吳市阿賀北五丁目三十三番八号
下垣内和人
電話八三三二七一九六番
737

廣賢兒

如



人心不同猶如其面作俳
句者亦復自甫執我所好
以譏彼彼亦執其所好以
笑我至仇讐相視者非惑
之甚乎予晚年慕蕙翁遊
于松窓之間雖未能入其

室、堂、雪工夫殆費十數年、
暇日涉獵諸抄、捃摭以為
一冊子、聊以付尚友之義、
近日書肆某乞梓以行世、
予謂此集一時隨聞見而
錄之、殆無示人之意、取捨

或未盡其公也、雖然寒鄉
僻地、晚生乏資者置之於
八上、則江山風月自在其
中、亦不為無聊矣、松窓嘗
曰、古人所好、一異其跡
裁、苟能蒐羅則可為大家

也然則此冊雖小安知非
其楷樣哉

文政己丑春正月

一具庵一具



九世 十方空二書



玉百様のしらべだるころあはれと
こころふくむいそいで大慶高橋を
方寸すたのむものすなり短
句もてあそぶふりもささるなり
けりいふかきとけれと昇平鼓腹
の御代のささるいそちりかなる
中にも帳臺の花の夕漁村に雪

此あけほれ盡すめらうし舟を
だもさういふもぬんがうりける
志りいれしと風雅の二字は眼とめて
うらせぬあまさらうまうらう
むとおもいりまあらはまじし
一日菴主のうらうらうぬふ
とらうらうらうらうらうらう

不やし子益つて園了實拾て句
書子しめおきうらうらうらう
此家事子らうらうらうらう
まうあふりちよとえそ極本子ど
さうあうらうらうらうらう
うらうらうらうらうらうらう
うらうと録譜のうらうらうらう

かみ餅	八	八	九	九
水いそと	九			
極物之部				
子の日	九	七種	九	十
まじり	十	十	十一	十二
柿	十一	十二	十三	十四
核	十二	十三	十四	十五
落の落	十三	十四	十五	十六
ふんち	十四	十五	十六	十七
サノ角	十五	十六	十七	十八
深の冬	十六	十七	十八	十九
連翔	十七	十八	十九	二十

草むぎ	十九	苗代	十九	ろくろ	二十
山吹	二十	ほし	二十一		
生類の部					
福この虫	二十一	白魚	二十二	まの巣	二十三
百千鳥	二十二	雉子	二十四	むくも	二十四
乙る	二十五	駒鳥	二十六	うき	二十六
疎	二十六	蟲	二十七	蜂	二十七
蛙	二十七	田際	二十八	蟹	二十八
飯鮓	二十八	落角	二十八		
時候之部					
むらぎ	二十九	ききうら	二十九	漆生	二十九
霞	二十九	おろろ月	三十	几中	三十

木蓮花	十九	草むぎ	十九	苗代	十九	ろくろ	二十
菖	二十	山吹	二十	ほし	二十一		
琴	二十一	福この虫	二十一	白魚	二十二	まの巣	二十三
雀子	二十二	百千鳥	二十二	雉子	二十四	むくも	二十四
鶯	二十五	乙る	二十五	駒鳥	二十六	うき	二十六
麦髻	二十六	疎	二十六	蟲	二十七	蜂	二十七
鯉	二十七	蛙	二十七	田際	二十八	蟹	二十八
苦鮓	二十八	飯鮓	二十八	落角	二十八		
佐保姫	二十九	むらぎ	二十九	ききうら	二十九	漆生	二十九
左義長	二十九	霞	二十九	おろろ月	三十	几中	三十

更夜	八	あひせ	九	青簾	九	葵の糸	十
ほつこ	十	卯月	十	早白日	十	あき月	十
夏糸	十一	夏書	十一	灌佛	十一	花浄堂	十一
新茶	十二	糸襷	十二	風呂	十二	みく夜	十二
麦秋	十三	小角豆	十三	か川を	十三	鮎	十三
瞬	十四	かぶり	十四	稼	十四	萱浦湯	十四
卯地うち	十五	競馬	十五	竹酔日	十五	九月月	十五
入梅	十六	虎々雨	十六	み月闇	十六	夏の日	十六
まの月	十七	夏野	十七	夏山	十七	火串	十七
葉らち	十八	田植	十八	早乙女	十八	早苗	十八
青田	十九	田草毛	十九	あさぎ	十九	らちハ	十九
帝帳	二十	帷子	二十	祇園会	二十	氷室	二十

雲の嶺	十九	夏乞	十九	昼齋	二十	土用	二十
虫がし	二十	あひせ	二十	夕立	二十一	節草	二十一
竹奴人	二十一	まごみ	二十一	風うら	二十二	うち水	二十三
とろろ	二十四	あき栗瓜	二十四	沖鱈	二十四	清多	二十四
さし井	二十五	汗ぬぐい	二十五	夏瘦	二十五	川狩	二十五
秋近	二十六	糸二清	二十六	伊後	二十六		
極りの部	二十七	名古紫	二十七	若楓	二十七	多糸襷	二十七
灯の糸	二十八	志のり	二十八	夏木立	二十八	下闇	二十八
青嵐	二十九	老盤木花葉	二十九	桐の糸	二十九	イね柚	二十九
夏柿	三十	まごみ	三十	樗	三十	栗の糸	三十
合歡の糸	三十一	愛後盆子	三十一	あさぎの糸	三十一	檜の糸	三十一

花さうの子てあうあう、夫婦うさ
く好ふよも毛虫よなうう、家様
ある人おめだしくと、花えんか紫
らうくととまててあえんの笛を居
花さのて死ともるい、病ひう那
と好ふ一ねゆるや葛城うらまら
沖安らや西行房りさ好ふうせ
首出して岡の花えよあらいとと
ふふまであそぶ日まてと、那えんう南
花ふら川りれて夢より恋ふ死んう
大佛うううふ花のけうり、この系
標の袋おびさうり、直とや花の中

其角 嵐雪 去来 大草 末山 正式 言水 荷兮 野坡 越人 路通 北枝

野

昆布物、や花、氣のほくう、花さ
酒初や、小琴の音せよ窓の花
大峯、や、よ、母の奥、花のそ
山や、お娘根く、のほとや、
あつじや、内と、花見の初や、
朝免、の、湯を、斤、膝や、庭の花
あり、あひや、初花、うり、の、物、と、それ
兄、弟、の、うら、は、あ、け、う、り、花、の、耐
敬、の、え、ふ、と、ほ、ね、を、人、よ、く、
危、瘡、の、あ、と、ま、う、う、い、ゆる、と、な、る、ん、か
葉、喰、う、る、身、ひ、を、と、く、う、花、お、る、
常、緑、ふ、と、う、は、て、た、う、ら、む、の、鳥

利牛 惟然 曹良 亀洞 杉風 孤屋 野水 荒彈 舟泉 傘下 春我 千那

あはけるや風車賣る花のとき
さよの山をことごとく入て歩よまん

薄芝
晨風

櫻

鶴の菓子嵐の外はさくらさくら
赤と白と母桜さし物をつらひ式
桜ぬきをうろくとるひとり式
を鞆うひこれやうろつん山はくら
かけみく降ゆまれば桜か
藤寺かくまぬりのかさえはう
殺々物門妾備うる桜茶を

芭蕉
其角
秋風
如泉
支考
李風
嵐雪

八重

足曲とをさくらやまきる菴
手枝ををくらもころろ山はくら
あつまらん奥やうろつや桜
雛の声もまきとゆかまきえら
屋形あけお山の桜ちりりけり
考の端社前をくらうや山は
食の附されあつまやや戸作
桜うろつあつりよるを食
そのまうと宵のそほ桜うろ
葛菟の各物くらん山をくら
筆ふくらを墨條桜かとはくら
流らのもせん草をくらん

杜園
尚白
利牛
凡兆
衫風
犬草
野坡
梅舌
荷兮
李里
備元
重頼

悉翻せよ芳野もたけ小江戸橋
浄法座のどこりつゝあり佇努橋

素堂
宗因

初橋

温石のあり候、夜もやちのほくら
七夕小契おきてしそ門をく良
小僧まゝり上野谷中の初橋
都立仍ねほつ句も物よ初さらり
ち門橋支物のうらさ海三世人
供ふれもどりのふこそよ是ち門橋
人の氣もかく寝つゝ初さらり
赤産や木ちりと産屋とち橋
頬白の終ふるかよ初九之良

露沾
鬼貫
素堂
芭蕉
空角
去未
治徳
治荷
園指

八重

橋

遅櫻

奈良七重七堂伽藍八重橋
花垣や雲も和光の八重さらり
赤てまはしつゝ候きん八重橋
八重橋東も候奈良七重橋
又ひてと道七重の橋を八重橋
万日の人柱ありとや遅きくら
まゝ着や三ノの下まなほ遅橋
誰母そ若に遅教くるあ七さ之良
紙屑やまらつゝ八重橋
はりぬまをまらや八重橋

芭蕉
鬼貫
吉保
治圃
幸和
其角
鬼貫
祐甫
常久

元日

としの日

八重

元日やありへのまひー秋のふれ
 元日や月まね人のほしーの音
 元日や海く^潮とくしらのるま
 元日や土はくうとふ^都もせき
 元日も猿人をえる 驛う直
 元日を明さぬーたる 霞う形
 元日の木竹間の競馬足ゆるし
 元日や夜ふりき夜のうら 表
 元日やまき尻有り梅のうら
 梅う香の船ふまよる初日くれ
 亀の脊小海老ほのめし初日山

芭蕉 其角 尚雪 去来 佑徳 一笑 重五 千川 猿 支考 鬼貫

初雲

新玉

着衣

始

濡いろや大うらけり湯日のけ
 朝紅や水うらくし初初をみ
 枇杷のまおはるやたしうら初霞
 吟少玉の馬もあかりやうみふ
 鳥のま西あま玉の手しらる
 あくまうあてまりる春日成
 寝あめりてほし綿やまきと
 母この紋うつじや着衣と
 後とくはう墨の袖まをけり

汪行 鬼貫 斜嶺 鼠雪 鬼貫 貞室 宗因 山峯

初夢

こよみ

まゑ

けりまや額ふあはは崩子よを
ゆえ咽て浪のりう糸や酒唄寺
秘ゆりや濱名の橋は今のよま
らん夢文のよき宙とやとケ日

下りのちふみし生のこころみうね
伊勢鷹みちれおくまてふくれり

るるうみや新年ふくを承五弁
春まや星の中うら松の色
年とまるとらん天の戸やあしあは

其角
嵐雪
越人
隈光

徳元
幽山

芭蕉
鬼貫
正式

今宵

今宵
の春

春の
ま

我々式ら宿あもるるやけされま
今宵の春夢孫も有るも有婿をま
かまぬ供ものまうしりさのや孫
伊勢浦や木村体む今宵のま
けさのま海ははとありまのりら
袖さうて松の如も繋るるとおれとる
夕はの春寂しかりさる閑この那
佛より神をたうとまきけさの春

二日あもねうらせしなまのま
稀る年や日もちらんけの春の春

守氏
貞空
嵐雪

正秀

兩桐

梅吉

冬松

芭蕉
李吟

おりのろやひの初折のむけすま
まの糸のまゝいとこゝろてむのよと係
ふれ人のまのむけむのむけむけま
五十あて四谷をこゝろむのむる
寤る政ての達しあてもむけま
背とらあむのをこせとや糸のむる

後代
の妻

福妻科

昌陸の松とんけする後代のま
治とる氣やまんとののまの春
福妻科一すりのほりえなり
らく壽草やの叫この梅は糸

後慶

意園

門松

うい
か

折妻の御共はふたれまをふ
長松の親の名をまをまをま

門松やうい為もわら武庫の山
らつら門の松をまをこつらま
門まのむけむけむけむけ
ままの門や二めんむけむけ門のま
門ハ松む葉園の雪ま

山葉ふらう白まは竈
らら白もまをこつら神の馬を

宗因

惟然

古梵

嵐雪

去来

野重

利車

正式

言水

富九

宗因
野波

鬼貫

宗因

正式

徳元

舟泉

重五

胡及

標

ゆけりあやみかすのふかきり
標の世阿弥まつりや青かきら

左圃
嵐室

大福

大福や淡路もみさの茶白山
大ふくやけふさそむの江戸茶式

鬼貫
正安

菫固

かこそやとん云さして水の恩
菫固や鹿書の神代あらんやと

言水
直良

書物

書物や行年七十持明の位
ゆきりややあゆまてそそしめ
あそめもまきや夜のまをかこ

宗因
其角
貞室

屠菴

とこの酒あゆふ五箇の小竜うな
屠菴酒やあき野も君う万毒盃

李吟
正隆

雑菜

さうあ煮や五代の教くむか何を
庭竈牛もさうあをとりりまて

そて
其角

大著

ち考や和泉の松木まのまは
ゆきりややあゆまの役け持くしえ

唯笑
秋坊

萬

字

まんまのやの富士の山あけのま
流れてまきふゆまのせり万才樂
万才のやまを隣お明くまら

青雲
一井
荷分

蓮菜

蓮菜の初もよそや雪恨の妻
蓮菜よかけとのかきやむ袖
蓮菜あけ山城密棋やふかし
蓮菜や船の近北かふるを

其角
衣来
維舟
湍水

鏡餅

古きも曰ふとせとをの海鏡餅
いふとやよね一河料の鏡餅

宗因
貞室

若菜

若菜や九ふ年のけり魚を
ころ水やふふらうくさ落氷
けり若をらうけり雪の掛
若菜の舞はるる涼しまよ

風鈴
武仙
龜洞
空角

玉

年玉とそれうまてもえ方うね
空しうまら吉風をあうく扇うを

可夢
徳窓

遣羽子

羽子板の捨松葉流や中との春
えね作らん羽子とけり子供うね
えと板の流はるる真れ雪

季政
満水
吾仰

糸

生死れむら男そと水けりひ
むらけの森やうと許糸糸ひ

其角
丁哉

子れ日

松脂のたき膏薬の子れ日う南
腰にれし子の日れ糸やけりう夜
をたれて糸もけりて死子の日火

貞徳
李吟
貞室

小松引

押ひくやめ存とのりる 姫小松
加賀小松引や越中や汝らも
引つとて松をくち体 荒うな

宗因
幽山
其角

七種

七種を之るらんうらさ首う那
七くさや跡みうか朝か
七種をたきたりて泣子哉
七さや粧ひあけく切きさみ
七くさく枯葉あはある草履哉
七種はくやーそめてや七ひやうー

嵐雪
其角
俊似
野岐
沾徳
貞室

薺

まきの草

四方より竹薺もあつてあつた
六日八日中毎七日のなりぬる
ふかきまて薺もあつて神木竹
一草の公拍子まをりぬる
風流のそるまをりぬる薺もあ
蘇くぬ薺もあつてあつた
草枕をりぬるなりぬる
まの板小室ー薺の青まをりぬ

誰の家のお油もあつたまの草
まをりぬるまの草

芭蕉
鬼貫
舟竹
無論
嵐雪
其角
山川
此筋
鬼貫
來山

若菜

隣はうらうらめひたる若菜我
 其の野ふはくちてなるうら菜摘
 きくくと雪付てこよいうち賣り
 梅若菜よりこの宿のとうり汁
 ころ菜摘めとる木を割畠うな
 うかれ雀妻よと里の船りう菜
 一かふの牡丹の寒き若菜うら
 くの市や雪ふ漕うはらうな舟
 霜を若菜に雪に樂まらる菜哉
 精出して摘ともる若菜の都
 吾うらも残してたかぬうら菜うら
 海をうら若菜を出る若菜の南

負室 鬼貫 来山 芭蕉 越人 其角 尾頭 嵐蘭 嵐雪 野水 素秋 素糸

芥

我うら鶴とこのことせりの食
 味ふ響芥梳はなうとこの菜
 摘よりのもえうらひまるとる根芥
 芥摘とてこけて酒かたむきとくれ
 初麴やま田の小芥うらと氷
 芥はらや歩安行いとまこめてけ
 名也けり芥の白根のかみあふ
 地の底は雪引玉を根芥の南

小春

芭蕉 其角 亀翁 且菜 定耕 野徑 幽山 負室

梅

身自異うむ音ま入梅のまうりこの素
 高嶺や海よりこれてうをのさる
 丘を根の梅ひらきさうり烟出—
 梅う秀や乞食の家ものさう節
 梅下—やまうてあう梅のとな
 さり形く梅もをさる月夜う
 病後の庭く梅のさかあうな
 梅の急すの気ふらねけ—き哉
 かりうま遊ふよ梅ハ敬ふちと
 瘦義や作りうあれの軒は毒
 ことくふ咲さうの梅と梅の花
 日あうりの梅さうと海や骨牛度

芭蕉
 去来
 交草
 其角
 嵐雪
 野水
 曾良
 越人
 惟然
 千那
 野坡
 支幽

梅

花白ふ梅をを双のこまをう素
 あうてまうる人の香もま—梅の花
 北面のえけひうんまとのむ免
 星と—登をわあまと梅のとな
 梅一本はうとく—草のさうさうあ
 梅をまらふまおのれ花もあのは
 白雲ををさうとまうる梅の花
 空を居く折もまうか—森は花
 あうさ—れ羽年を度ま—まは梅の花
 梅ままて湯後の宿まうあ—け
 妻さうや白の梅木のよきまうり
 梅のとなあふよひうて白ひう自

宗祇
 貞室
 季吟
 宗因
 露沾
 鬼貫
 竹亭
 鷗步
 万乎
 利牛
 曲翠
 來山

柳

ちれりのお柳のさつる志あへこの耶
 下風よまよしてありののやうききう多
 池あみみとりをらしそくやまねか南
 りふの日を柳中りて川そこのふ
 柳うみのと祿りとゆひう三日の月
 沈み懸るかさうきかふ柳うけ
 おりひ出くりのまつかき柳うま
 傾城の賢うたふこのかかきう南
 目あふ林はくや柳の春
 春柳のうらりそめちふ板戸う好
 引よせをまよかひさる柳のう春
 何ともなうととてりやまきう春

芭蕉
 貞室
 宗因
 鬼貫
 李吟
 素堂
 戈磨
 其角
 嵐雪
 春菜
 大草
 越人

草

下

柳

天よりうらやうさるぬる柳のう春
 さうれく柳を風もとりけく
 よとと川柳とを流るき柳のうれ
 朝日ニもかあまのうとく白ひさ
 と絡りをもつてして被一か柳のう
 障子と一月のあひうそ柳かま
 町さうとあさうく宿のやねうさ
 せきまのの尾かえはけりる柳のう
 やふの雪柳とうりをすうと柳
 好く風も牛のうきむく柳かま
 春柳れあうれや柳のうさうと
 ちとくへき春とむら柳のうさ

小春
 一笑
 尚白
 荷分
 湖春
 素龍
 利牛
 一風
 杏雨
 探丸
 一噴
 春水

野老

とこふ 賣声 大赤のさしとひるる
變ふふらとや 野老や 市の中
ぬいしや今も丹波の鬼ところ

其角
苕蕪
真丸

下着

下着や 履こそとゆうのこころ
下着の氣ををけさや 其のそ

二川
李由

若草

若草や きのめの筋 足も木綿賣
けう草ふら川 祓うましや 羽うま
ま白ふら右 今とこころ 明玉うま
つらふら けふか 下着 上着や 二正まて
そと 下と けふ 春駒のよとけう

空角
野坡
龜助
問津
良俊

椿

うらひまのまおととと 椿のな
曉のけり 人みあつふつと ときう那
藪ふらう 鯉まきのけう ね 枝うま
鋸ふらう まま 見ん けう ね つらき
まも 玉の 露 まま かつく けう 成 枝
枝まう 伐らぬらう けう 枝 けう
ちり 椿あまのけう けう ま 横て けう
取あけて けう や 椿の けう の あま
徳の 枝まう けう けう けう けう けう
口紅の けう けう けう けう けう
土ととふ 羅 けう けう けう けう けう
飛入や かの 海底の 玉つと けう

芭蕉
荷分
卜枝
嵐雪
車家
湖春
野坡
湘木
残香
鬼貫
孤屋
宗因

紅梅

紅梅ハ誰も道一音の深小袖
栴や紅人のけいひの初かみ
紅梅の紋や仙家お庭の雪
お梅やえぬ虫はくろ玉さき色
紅梅やかの浪園寺やふれ垣
行栴や比丘より劣る比丘尼寺

立圃 鬼貫 元永 芭蕉 沓徳 蕪村

木花

そやされくさくぬ梢も木の芽哉
木の芽さくら雀かくれやねひあり
られくも去年の残穂の木の芽哉
まのめまて四才をまゐるれまゐる

露川 均水 野蝶 玉鞞

若緑

のえやうう入神の連杯のみんぐ緑
若のみとり神のなぬ松ひねりれと
黒やとの雲のそくちやまふとま

鬼貫 東山 土芳

落の塔

駒をえて雪えは僧小落の塔
踏まきく出遅の切目や落のまう
せつてある落のまうく山踏うな
その白ひ紙燭消てもゆきのたり

其角 拙候 即章 調竹

莖

莖くちや五條あうりくま真の
あうりたりを莖えくちやる明中
ほ賢く人莖くちの園ふかられりや

百里 野徑 露

五加木

春らてものまやとていじまを五架飯
うこき頃とちこの客をのをきりり

鬼貫
儿董

す
み
色

何のまもはるぬよ去年の莖う角
糸あじしと馬あへのくね莖草
おりのけお松の葉うつく莖うね
莖叶小縮あふひーあとやこれ
法度場の垣より内へまを色我
葉前くすまれえりの知を童は
堤よりあうい落れへすえれりち
松うけおさくゝ硯のさくさか都
とくぬふもりのおままふね莖状

忠知
荷兮
夜章
曲水
野坡
鳴歩
馬菓
如貞
その

鞍
料

たんちくめさのとうかぬ日かみ大
教草やうとそそのまねまきけに
ふんけいの物いこの日七伴の壁

普松
栄春
新門

は
ぐ

まごくと楯やはまのふはぐりし
ほぐりし頭巾たさあろ却せりう
まごくと親子はみりつりし
春雨もたなきおたり土筆
まごくとと葉山子のひろて女等

其角
音江
舟泉
元志
蕉笈

薊

行蝶のさりののとまねあさこころ
をらうこの野辺のあさろや陰形鬼

燭遊
三九

木瓜

草足俗や野へあつてうみ木瓜の花
かひうらの底で焼くや木瓜のとき

銭蓮
芦文

芦角

ゆじまへあつての角玉を濱の芦
はのくわやうらゑの鬼のやう后

路通
勝重

接木

接木ゆ梨の接穂や山をき
はまののかくしう接する接穂式
世の中をまことんかきうね接木哉
春れさや接木はう船の咲かき
一方を接木う接木の接木この南

芭蕉
傘下
淳兒
清門
越人

獨活

雪間より落葉のうらうら
せうりな死身の瘦あつて
ゆきゆきあつて自らのまのとき

芭蕉
嵐雪
配力

茶

摘

うらうらまを屋敷のゆき茶摘
柴舟の里の茶摘の水けり
藪の根やゆきゆきゆき茶摘
まうまう茶山をゆきゆきゆき
たうの丸もゆきゆきゆき茶摘
後人の一茶ゆきゆき茶摘

鬼貫
其角
去来
正秀
玄茂
杏雨

菜

菜の花や一本咲く一麦のり
 山女の寄菜れおのち鳥かや
 かの花の小枝さふ角ありひて
 菜花の枝の叶後にくつる日影の
 かの花は出づやわりのま核かき
 菜のくちねの睡らち残をさうちの
 麦のまふ菜の花かたれあひしう

種

桑育や天氣定めて種おろし
 古河の流しを釣つたねおろし

宗因
 芭蕉
 其角
 傘下
 園水
 長野
 清洞
 不悔

其角
 燕村

桃

桃の

我花は伏見の桃のまのくせは
 菓子さきにひく形や桃の花
 おのくの桃のしりや等持沈
 ひるふけふのうやあえの桃の香
 妙もも子もあましのこを桃の酒
 桃折くつりありや女の子
 りくのまを境をさるぬ垣根うの
 日の入や舟小見てけりあつる
 金柑はまを盛りなり素北いな
 梅さくら中いたるまをりよの香
 角菱の飯おありとも桃おろし
 梅の飯小なりたるまをりよの酒

芭蕉
 其角
 嵐雪
 桃隣
 傘下
 羽江
 鳥巢
 不髮
 分我
 水鷗
 鬼貫
 貞室

海棠

海棠の花はしらうり夜の月
海棠は女爵と猫とわらうるね
海棠の花はゆるる花の丸麻うあ
海棠の花のうつやあはる月
海棠やあハッうちあま堂のあ

普船

卜宅

豊重

其角

史邦

連翹

れんきまらや茶山山吹を捨ささる
連翹や柳ふまふふ牙嘴み
れんきまらうの白くく庵の風味る

巴静

麦雨

峡水

梨の花

杖つらと人のまらりありのえな
志のえと毒毒に似たり梨の花
まらりありのまらりありのまらりあ

鬼貫

許六

野童

杏

杏はうの何杏のえまのうは
杏はうの何やああの一のうは

貞徳

暮四

辛夷

血紅もえをえとあーの花をん
ゆふこれの鳥ふらりのあふうね

羽長

梅車

木蓮

あふの葉せんをねん天目ねんけ
物いをねあやうりく木蓮んけ

貞因

寂靜

牡丹

草ひまやひまらり、上はあれり
くさまの真んひるなり花のま
一柄は一はあうりやまのしあ

鬼貧

治徳

春水

苗代

苗代は老のちうちや尻とことき
まらうちや府匠の移る畔傍の
迷うらん苗代ころの田は移るを
苗代や八を恒はく出雲融
く形かかろりまりのまたてうお
苗代はまろくかかろりの二奇の種
なろりや此土をかへて隅田川
畔道やまろりう村の角大師
あろくや苗代まろりあろり風
苗代や尻居へ行てまろりはろ
あろり風や融るの襦ちろり

嵐雪
空角
氷花
木也
元春
徳元
資仲
正秀
仙化
鬼貫
草村

蕨

蕨

早蕨や海谷の雪ふろりころり
里人と相まろりころりや独流ころり
葉刺ころり上とと極る蕨ころり自
まろりんや大草のまろり山ころり蕨
まろりんまろりまろりまろりまろり
関ころりて愛も蕨ころりころり我
白蕨と磁味まろりまろりまろり
小坊まろりまろりまろりまろり
風ころりて静まろりまろりまろり
蕨の根やまろりまろりまろり
松まろり蕨木まろりまろりまろり

貞室
宗因
其角
幸順
勝政
宗祇
其角
嵐雪
松風
貞室
宗因

山吹

せしとふも居の後のほちと我
 ととも世と後ふ深とく墨ころも
 山藤のゆとのゆくみん机う角
 あつらかく岩うらやや後のをみ
 後やた君ふふれさるほそりれ
 山吹や多きまきとんき枝のうら
 月雪ふ山ふき花の素顔より
 山吹の夜ハ黄金の肌志の角
 やまふ花や垣小丁よる裏一重
 一重うと山吹のそく牙詠うぬ

荷兮 宗汎 去来 丈草 七の 芭蕉 冬角 季吟 圍指 際重 西堂

ほじ

山吹

そりのたて山吹のち 岩根の南
 山吹と蝶のまきれぬあじうね
 吹まうまきやそえあふ風玉うら
 山吹やまきて樹のまきのそこ
 やまゆまきやたくて流る花の水
 花うそむりふよりく赤ほし
 裾山や虫ゆくあとの夕躑躅
 赤これより木無一見のつしる花
 白ほじしすゆかうまり角角
 まーそのゆとのめをさつー山
 さーのそく窓へはけーの日まふ

蓬両 卜枝 貞室 春を 半強 宗能 芭蕉 若角 龍者 木末 大草

鶯

ほしほくろしうやうき石性翁
山つじ流かきよとや夕日かき
あーいけい眼白いまつじう翁
老ふけいこまもよりや岩ほし
あういせつじの流や羊の乳

鶯の感あうけのこやーい
ういさや氷をぬこまを朝日
黄をのや茶の未畑の朝月夜
ういさや肉のもまけの野うい
鶯のれいこまをえれ小より津

ういさやとや一声のまより秋
鶯のや空のまをこまをなうら
ういさやの義いまをいあめ水
鶯のや門のまをく豆齋うり
ういさやのまを飯こまをいさ
鶯の二正まを月とゆつをう申
ういさとの声よ記りこまを
ういさのまをやつ年うい雪の流
梅齋や鶯のこまをかせうそこ
ういさのまをいこまをかせうそこ
鶯のまをいさの義も捨るま
鶯のれいさのまをいこまをかせう

桃隣

智月

氷花

幸茂

貞室

芭蕉

其角

丈艸

去来

嵐雪

一桐

溪石

魚白

鉄枝

野坡

梅香

心主

桃隣

相阿

山川

夢々

一笑

惟然

猫の感

うぐいすやまの丸お出る声のしる
 うぐいすの枝の小枝よ異どく
 黄鳥や國栖はなりの笛の音子
 ま飯ふゆらう感の初このけま
 うき友にわらうと猫のそらなうめ
 深窓の頬も紅うやひさう猫
 葉多とくろをて猫のねりうお
 已る脊尻とつらむりかへ猫
 かくれも感猫よ伽羅焼てうねる
 笑、跡を妻とくねとや雪の中

宗因 鬼貫 貞室 芭蕉 去来 園指 半寂 秋色 嵐雪 其角

白象

猫のときわついの見や尺かまひ
 うき恋よなくとや猫の盗くひ
 のら猫やうめいゆくと板の中
 うきまひ濃茶付ふのいつか猫
 白象小價あのこととよみをま
 あら象や漢氣を蒸まんあひるら
 ちん象の餅ふらりあの水の泡
 白象のぬきあひや枝のはし
 あら象や冬ふやゆゆゆ
 白象や目まををををを

琴風 支考 大草 野徑 芭蕉 其角 貝隆 之道 批候 荷兮 鬼貫

鳥巢

巢をとりかきや世とよ下造此
巢かくりやあまれいらの者か
巢をまゝとるや子あはれ祝ふくそ
鳥の巢よ去年のきかき花の声

昌房
之次
一聖
鬼貫

雀の子

人あおけ人あおけり雀の子
魁らちふらさすうめの子廻う結
荷鞍ふひまのさうめや縁の先
日の新やこりくの上の祝すそ
哪々や爰ふ教ふね村そめ

鬼貫
河瓢
土芳
珠碩
宗因

百子

初もといと羊の冠の百子
玉子鳥都々切の日和一の南

鬼貫
白
其角

雉子

父母のあきりか鳥一雉子の聲
人うとし雉子とさうゆ休むの聲
鶏のさかしのりん雉子は 雉
何のあふ新と移らゆ雉子の照
下造の声さそあらし有部雉子
高声よ流るとゆひる雉子うね
あひ子とあると似る雉子の声
行かすを端魂さして雉子うね
身ふたひふは前の雉子はみとり大
一まもこ之声もろりぬまもこ
うのじやまふし得たかたも
ゆうしはのあてしきや雉子の声

芭蕉
全南
夫未
文章
虎名
一聖
十那
陽平
板七
衛門
言水
鬼貫

雲雀

雲雀よりの上ふきとくふ峰のまふ
あふのまよ経てえん跡以のまをたうの
胡こまふ回一むらりうを根のそら
逃ふくく、時くせけり夕影とま
羽おらけにいくへの雲おるくま雀
枝の木と定規おのゆる雲雀う再
帆けくらのせこよりおろとひより
乃おもまこ障子とる目を清くそり
棠橘のるくおみおらるま雀うぬ
口とくく雲おみおらるひよりうる
新虹やおうしよりのおろらうる

芭蕉
除風
文草
翠袖
溜橋
氷花
其角
如泉
言水
梅盛
素堂
定因

帰雁

そのまごも北へ帰雁の山路のう
あふられやあうるまかまうるる雁
ゆく雁や新山をまきのまぬくと
居帰てりのおあちうや雀のひ
小田久とと秋も柱やのくは居
かへる尸帰とい紙る勢ひなり
立さわや今や紀の尸いせの雁
行尸おさくら下まき修けくよし
まてや居おれて周防のゆりり
ぬまを田螺ふらひてかへる雁
かへる尸富士の裾田の砂ふら
くへる雁田毎か月の星を夜か

貞室
鬼貫
水哉
素山
其角
嵐雪
以唯
八峯
楓子
子莫
長非
燕村

玄鳥

簾下入りて美人小別を燕うの
影あふふ裏ははくまのかうひ
あそふとも別ともあふね乙鳥
傘小糸ららかさうよねと乙鳥
はらうの雁も同じや鳴まう
笑あふま出されしはあうね
いまあこといねそりの玄鳥
燕や田をとりかへと馬のあ
巢の中や又を細くしてあや燕
からけりも下りものつとあう
土車引るも休むはあか那
船網よゆあ仲の乙鳥うね

嵐雲
凡非
去来
其角
丈草
荒彈
俊似
野童
峯嵐
柵兩
舟竹
巴山

駒鳥

夢のねの鳥もこころはあは
老後の子炊炊をまじり燕う
こころ細かあうつとあう
乙鳥のあふ合しき白浪
朝あけや人見をあて踏むの
鳴

枕舟
合志
小春
長虹
捷花

鸞

鸞のあうや赤襟あふと日影
横木あううそのあや吉世琴
糸の雪ほろとあやうその琴の音

三章
山只

麦鷄

麦あうき及むとときあうは
あうとなく鷄子麦の夜明う素

沽袂
飄竹

蝶

蝶のとぬとりの野中の日影うね
 移る蝶よりく まゆとさるこころそ
 ら川跡と兒のふん出とをひる青
 蝶の舞あつる核ふるく ねくか
 とほりとも 翅とらとく 胡蝶飛
 蝶のまて印とよ移りけり葱のまや
 初蝶もよそおく 芥子こひ 二葉あか
 かやわりの中矢出うぬ 胡蝶うぬ
 枯芝やま若葉あふる移り行こころ
 空を舞して花よせわしき 胡蝶うぬ
 沖の蝶波まよとまてを移りり 我
 世の中やてまてとまれかともぬれ

撞琴 其角 柳風 園指 柳栂 手殘 好春 吹玉 百歳 雪窓 戈磨 宗因

蝨

蜂

蜆

花のあそび 此のくくひそまきまぬ
 この蛇がふととて迹を 烟のうぬ
 人もまて 曇き日 ぬれ 蛇の声
 糸ささるり 蛇とりのかやあはしうさ
 蜂の巢や 留まるとて 花に盗まれと
 まうとよ 花波ふ 蜂の往かへて
 山吹ふゆ 火のらんとて ちの 声
 ちのの巢や 一回く ち兄弟
 野田村の蜆 ぬえたり 煮のとは
 石のつぎきまうれや ぬきまきみ
 蜆のうぬ 知はもとて ぬまのぬれ
 あまちのら 蜆とさるる 胡蝶うさ

芭蕉 其角 星泉 乙列 杜洲 園風 沙鳥 蘭二 鬼貫 其角 虫亭 巧真

蛙

鱒

古沈中蛙とひこむあのおと
 よしなやまの林とひかきり
 田の畦や虹と脊負く啼く蛙
 ちんちん蛙ふそめるさきこり角
 松風とうちこてまきく蛙の奈
 山の井や墨のこりとふく蛙
 ふとつて折ふのあるかきり角
 まきくと我頬まのりこのを川
 めうまみあしつうさうふ鳴かきり
 けしひあ蛙はくさる浮きあきり
 尾を落くまき啼あぬ蛙う角
 とまり江や火と焚舟ふる蛙

芭蕉
 嵐雪
 去未
 其角
 丈草
 杉風
 工齋
 嵐蘭
 越人
 仙化
 蛟豆
 天磨

田螺

蚕

氣浦

海とほのて身中あたるかきり角
 から井戸へとひこまきり角
 齊の道ふるれもまきり角
 袖よこそとらん田螺の海士のひとまきり
 入るる 鱒もあはふ田ふりから
 里人の崎おとさるる田ふり角
 行るの中ふまきり角田螺とり
 景政う比目とひろふたあり我
 孫とももの蚕中さうふ日向う角
 痛ておまきり角蚕我
 そまきあうとまきり角羽かきり角蚕

宗濂
 鬼貫
 宗因
 芭蕉
 丈草
 嵐推
 交浪
 其角
 其角
 知足
 陽和

若鮎

鮎の子れ白奥かろるけうと南
多鮎ハ精の一甬ハ足らぬあり
水沈そ一廻の目ふき小鮎うな
鮎小の由菴の帯成乳房より存

芭蕉
戈磨
重政
素堂

飯鮎

いひたこのかめいやめれて果るける
飯鮎のおりれ豆うふ河内越

末山
沁徳

落角

一の谷をやまゐる鹿やむと一角
角あちて大とみまゝや庭の鹿
つゝの落一カやあつるあられ友
角あちてと日をもうは男鹿うね

一夢
琴風
近之
朱拙

佐保姫

さかひめや京うらむんへの哥の母
佐保姫の値今と硯や筆の海
しつきてふ家初ら佐保のあちん付
いそくくや大和西月こかきまま
昨よを貝酒ハれのりしつと月
待中の西月もろやうとり月

可理
如流
貞徳
鬼貫
言水
揚水

ちんき

ちんき

ちんき
まきまき
二月の雪とけておつやとろも川
まきまき
まきまき
まきまき

芭蕉
蕭山
之次
惟然
千那

弥生

淮國もやうひの海の道千筋
三月やをれけりききれ粟下木
さくさくちる弥生五日ハ忘れま
富士ハ海めて三月七日八日うき

露 沾
去 来
其 角
信 德

尤我者

左義長やこと一の相次帝祇
尤我者のそらふもあたらん鹿

旭 芳
幸 以

霞

小泊船や眼渡もよその島我
あふさあもとうや湖あはれまうは
里かたむゆふ久松のはりりかふ
行くて程のあたらぬうきあう

宗 因
鬼 貫
野 水
壘 交

花と物で移人あそこむかきとこの月
三帆舟と塩尻あうらうはみうれ
見ええ且ふ必強らや一又かきと
海とさや歩ともゆきまへは鹿
破見歸とすまうかきうる鹿うれ
つとを後てかきうけ成打うきと我
浦くくの空水帆かきうらみうら
我宿もよそよりうらなれん鹿の素
八重かきと奥もてうらなれん鹿田

嵐 野
其 角
越 人
岩 翁
子 英
冰 花
風 洗
月 下
杜 園

朧

月

唐寄の松を志すのあはらみく
 夏の一とよ子闇のあけくの朧月
 大系や蝶の如く舞ふおちろ月
 おちろ月まことまねね朧月
 なげ山や籠の月れまゝ
 中川やけろくまらんとおちろ月
 山のひやたりへよりておちろ月
 夕かまこみくして朧とまろく
 おちろ夜と白濁りのまろく
 朧夜は西のやまらん猿の声
 ねちろ月まねね朧月
 朧くこりて矢もや淀のえ

芭蕉
 去来
 丈草
 仙化
 式之
 嵐雪
 元峯
 龍彈
 支考
 祐洲
 戈誓
 鬼貫

凡
巾

殺

八

物の名は鮎や古脚のいろのほり
 ぬりまろくやほりかた
 糸はくろく人とあまろくやほり
 夕ろれのりのちきまやいろのあり
 いろのほり西のあまろく
 いろのちりまろくあまろく
 いろのちりまろくあまろく

赤因
 耳角
 尚志
 戈誓
 トと
 園風

かふりりやひとつあまろくやま
 殺入や浅草うけて芝の海
 かふりりやあまろく自炊の酒は碎
 殺りりや我殺りりあまろく
 かぬりりのあまろく小豆の若たるら

其角
 琴風
 専吟
 咫尺
 蓮村

餘

花もまろ埋火のぬる梅きりの車
ひまな子の徒おきし山とう
傍心の藤沢さくはく竹葉うら
繁の戸付史跡ちひまは梅きり

定義
其用
野童
笠村

河返

雷やひとむらさめのさえかへ
さえくくかんとあつめさうさ

去来
桃盛

焼舟

る帝て焼野のあられさうら
はやくと焼舟早き口ひら
山さると小松の独る中け世の

乱糸
曲之
衣木

雪

間

らま中ゆあれて雪間のよあな
光陰の矢間あひける雪間を
草莖を包む葉もなれ雪が
酔さよて暮葉摘る雪間

きで
兼次
甚前
万子

残雪

木枕の垢や伊吹おのころゆき
かきと消て富士を纏ふ雪胞より
雪残る鬼獄さしき赤生々身
舟くの小松小雪の残アけり
軒の雪盗人のえの取のと

犬草
其角
言也
且兼
復室

東風

徐に東風くる雲のしそきうれ
暖簾よ東風ふくつせの出店

去来
燕村

春風

春風や人声のつらき山
さる風もこころを離の駕籠の気
まうせふぬきもさるぬ羽織我
さるう勢も吹かされり水の胡蘆
ほる風や蝶こころをさるー此声
世さるぬの法師の旅や春の風

芭蕉
芥子
龜翁
去来
茅山
荃村

雪解

北國の賣夜を足まの雪消成
雪消て大声雨さる小さるる耳
松の雪まきさるや声もあけろ山
雪さるるや蛤の音をあいのとこ
さるる時ハ氷も消くをさるるり
氷消く風もあられそさるるるま

沼徳
掘隣
春泥
木白
路通
と

春雨

不世まやのまきとままー春の雨
さるまやや田舎のさるの鯉さる
春返れあるるや軒中なくさる
けりさるるや山より出れ雲の門
ま雪や何さるらりん嶮山家房り
さるさるのさるぬ馬のけあけ我
ままさるる九つあまる枕の菊
さるはち守我ままーひの行所
けるさるるやさるるのま枯つじ
ままさるるや枕さるるさるる本
状さるる紅戸も洋さるるまの五
春雨や急さるる川人せさるる

芭蕉
史邦
羽紅
猿雖
丈草
堤亭
秋色
芥舟
其角
支考
鬼貫
真室

春
雪

酒をゆくわねてゆきけり
淡雪や雨ふおろし
ふりけしとことく初と春の香
下庭の氣色をけきやまのゆき

来山
風麥
直重
李由

春
日

かみ山や花さくし
まの日や庭ふ花の砂あはれ
如意橋や衝もかごとま
船橋もま日みめくむのめや

負室
鬼貫
其角
浜徳

春
夜

まの夜や草津を鞭の差どろり
春は夜ふ尊兒は西を守り

其角
蕪村

春

海

青海や古鞍ゆり
又は行遠山雲や春は海
松陰や旭みゆくを影の陽

素堂
芳川
不卜

春の
月

其の月琴子物かくそ
春月や中令堂の木は間より

其角
泊徳
蕪村

春
夕

鐘はくぬささるぬ
赤猫のうさくなりぬ
急や根ふささるはくの春の暮

芭蕉
普船
山店
負室

去の神

ありのゆるる 敵のひうりやまの形ら
ゆるの野やうりれの神あうふとえん
海に并雀をととる 其れれう角

杉風
羽紅
負室

春せら

ゆるの水ふ秋の木れあを中るええ
春けあうく社書のふんげにしらぬ
物ゆるー奥の兒えれ其れ其のあ

嵐雪
其角
沽徒

水ゆるび

水ゆるむころや子鍋もおりあき
汲み出く髪とく水のゆるころ角

阿漕
文水

海雲

りつくと海雲を近き朝日このあ
まのあう海雲まらーうとら角

峡水
抱月

海苔

かきよりの海苔と老の妻もせて
海苔さうく水の名ふとと都る
人のさうさうわてのちや角のて
まのりのやうーあふららん磯別去

芭蕉
其角
杉峯
尺草

寒食

寒食のさととひーけふそのひひ
ひのふもま食の日は腹を
ま食や旅人の雪の踏まを
今寒食とらま食は家より自りま

桐雨
氷花
月下
其角

柳餅

雨のさう柳とさうとや草の餅
伊吹山さう柳の間をさう柳は餅
さう餅やさうさうさうさうの白ひ

芭蕉
政玄
埋然

陽

炎

幽

枯草やまこころうらぬの一二寸
 うけらぬの抱付はつらうらぬ角
 かき終るや巖かこゝけけらら
 陽さやまはりともつて廣り駕
 うけらぬまこころ矢の沈む中比
 何をうらぬの昼と夜中のをさうぬ
 陽さや隣の葉さ人とさふり
 うけらぬや障子のさうら金屏風
 陽炎や小磯の砂もさきこころを
 かけらぬは夕日にいさなけり我

芭蕉
 越人
 配力
 去来
 山川
 達暑
 犬舛
 普船
 其角
 舟泉

系遊

二日灸

午

系ゆやまこころいけけらぬけり我
 けりくと系遊やまのゆきあやま
 いと遊やまのまきを簾の人柱うけ
 系ゆやまのゆきをぬいと体端はけ
 いと終るや左の人をさるまけの炯
 小窓ぬるまの目らま二日灸
 二日灸系ゆらぬのめらまなり
 初午やまの錢よりみへ芝居うら
 との午やあせぬつゆあまひとじ
 けらぬやや澱をさるさる戸開
 初らぬや稚くまきたらうらつみ

芭蕉
 力管
 乙吻
 氷花
 鋤立
 その
 儿董
 其角
 支考
 野坡
 川支

彼岸

御忌

夕の午やほとり小霞の通り筋
 初午や妻の影多し素浪人
 夕の午や役の行者此方な路次
 初午やその家くの袖くみ
 精進をまといそれ親の日暮う
 彼岸少くひくん橋のちりみきり
 渡し舟武士はたきある彼岸式
 橋さくひとく舟跡陀のちんか系
 御忌まわり都小錦珠数袋
 御忌の鐘ひくくや谷の氷ま
 日小霞月舟氷や御忌の鐘

立圃
 沾植
 壺月
 蕪村
 末山
 彫崇
 其角
 支考
 言水
 荖村
 几董

涅槃

西行 忌

神垣やおりのひもひけき涅槃像
 さる母と小千と舟物こそうみ佛
 孫子少いとままてを記孫とん我
 きまうたの日記もくくや十五日
 このひや常のちりまき涅槃像
 ねとん舎やはねうら赤地日の光
 天人も泣教うら一徳とん像
 銘鐘の文を愛あられ涅槃像

芭蕉
 宗因
 荏子
 鬼貫
 野水
 言水
 已百
 希因

西行の死出路を旅のはしあう
 西行の死出路を旅のはしあう

其角
 杜若

永き日

年暮おそき四谷ぞけけり糸茶履
永き日け遠近人とかなふふよや
賦法のゆきをよきよき日そ長き
日さしはへまらるる速き瀬田の橋
永き日遊ひまふり大津る
なうた日や子小にゆいそ夕くそ

芭蕉
元峯
許六
宗因
鬼貫
道春

出代

出かそりやその門は維辰の市
お勢や照日本下路をそりて行
出うらりの間やあそふ花のと見
出かそりやは空の泊り遊女の果
お誓りやあいのなるとをからけ者
出うらり小園司王丸の鳥籠哉

嵐雪
知足
淳萍
幽山
藝言
肅山

籬

出かそりや人おくせりも連流うら
お勢ふかそりや藝のゆいそ後
出くそりやをるまめくと古葛籬

其角
木導
荃村

草の戸もそみかそり代を籬の家
籬うまてめそあや籬のいふそと多
とらふやとや都のひるふま帰連
隣く籬へんまのゆき小家う系
つことりて移ひまそりそ籬の只
夫婦籬むとそえのとつていそせん
訪くぬ成りのおひなりのあふの籬
山崎の櫃うつくこまゆい遊ひ

芭蕉
車未
鬼貫
嵐雪
其角
達暑
霜白

鶏合

跡生あも中よた雞のめそひか
あやうのし柳子ふそくく逆毛我
勝鬃の世とそ名荒れ抱はまのり
赤いのひ五後れ上しうとり合

笠下
其角
言水
君里

汐 下

取あふむ比目を踏ん志ほ下う船
汐下られて蟹う裾引なかりかぬ
人うそむ舟と陸との汐下う南
雨川ふ富士のかけなた汐下り
き深よりふの汐下や田植と
帯ふと水川吐あう傍志ほ下り
響響うりて汐下人の人汐下う
沖水うふ足めとはる汐下か索

其角
嵐雪
友重
園指
介我
沾徃
如泉
挑女

馬刀

鞍人

曲水

畑

打

一の洲へ都の客と馬刀とりふ
馬莖の馬刀うきよせん筆の鞘
さの人と馬刀とりふ

鬼貫
嵐雪

曲水や見まうとて体やとならば
曲水や岩舟ころころみねの川
曲水よ椿さうねり山路の南

其角
希因
大兔

畠ら門あとも嵐のまらら麻
ちかくと畑打そらやまらみ風
畠打や傍う雁ねりのかきり
畑うやうとうね雲もななくのぬ
とて打とけれぬの爺や川白
畑ら川やひうら志賀の都人

芭蕉
好風
路茨
荻村
秋之坊
乃翁

長閑

人の世や長閑な休日の寺林
肩付の幾世ふたりぬを閑心
のころきを物もわりのぬ朝露の
長閑さや空ふらぐもさの声

其角
冬文
杜園
雨什

刈霜

ゆく病もつれなきおの別への
初夜後花の透つた中しり色霜

千那
松吟

峰入

峯入や一里おらゆ小山伏
らぬ入北花踏つて素足う有
峯入や雲ふ起卧とき人もあり

芭蕉
六龜
重頼

行夷

行夷やさる帝魚の目とらみこ
ゆくさるや松を雄鳥のいとれ貝
咽ぬ間の星も嵐もころはりら
ゆらぐ底のぬけうた松う有
らるるぬ名を引春や親あはを
引春お頬君なほから門う宗
ゆくさるもぬ野鹿の野守うお
行はるやをさるおほく鐘の声
ゆく夷の夜を結ぬ秋の籬うら
行夷や横河へのゆるらもの神

芭蕉
其角
犬草
支考
暮四
湖春
野水
山川
鬼貫
若村

在明のおりておとそやあしくあを
 御成筋いうなはをらを子規
 けしとを神樂の舟を海より
 親を谷子か山あのを何とを
 汚けけあまふ啼け都とく
 時をその目くのそろ絲い有
 杜宇とぬ夜かまろくかうら我
 ううれおと山久とされく蜀鬼
 とひまんとさすうみやこの子規
 馬とらぬとえりの合多りやとを
 らいりのや力うあききとまこと
 蚊をくさき痛さあうつこり時多

其角
 嵐雪
 玄札
 正由
 利冬
 尚白
 宗因
 去未
 式草
 鈍可
 傘下
 一髮

何とくまをそれくあむ野の度と
 おひし子のにをのれをや都公
 目あけ昔は山やとくまをの船
 何とくま及一声あはは雀の声
 若昔の朝雲かち一本とくま及
 四五丹のうあえさ浪や都公
 不とくまを文まうと定まらぬ宵の電
 松島や路ふ身をうればとくま及
 星初と門啼うしあや蜀鬼
 杜宇なうねのうらぬ月夜うな
 湖をとくまかかをや物とくまを
 知候まてはさのそりそくと子規

柳風
 松下
 素堂
 杉風
 惟然
 詩六
 卯七
 曾良
 團友
 朱拙
 樵先
 智月

左羽ふ山花ぬけはほろろきき
郭公まうぬおまほし朝慈山
西の岡を帯ふまはたりの母とくを
附るまうぬらう流のをりもり
おりのこひ森とあふしよ郭公
啼く人まもたひくちあうたを
附鳥窓くらうしとく人をあ正
青くもや舟形くしかれ子規
高きまやめれうた中の杜宇

目とく音や山花ぬけはほろろ
おりのこひ森とあふしよ郭公
啼く人まもたひくちあうたを

野坡 支考 風園 荷台 北枝 正秀 土芳 素怒 酒堂

閑古鳥

啼あしてとあはまはねかひこ香
谷より半室あく風のうへこ香
閑古鳥の声水脈ふる山崎う香
かひか林し啼行か林しかんこ香
風ふるね森のあけや閑古鳥
拙まては山田ま青し宗古香
かんこ香啼や蛙の目かりよま
草卧く芝み綿あけし閑古香

山中やうらなを老く小六ふし
にまふ似や老の香をうりこと

老香

釣壺 乙物 鬼貫 瓢界 其角 舟竹 洒堂 正秀 支考 宗因

鶯
まを
入

うらひさの音を入あ年々ニッ星
鶯やまを啼こんと草叶

嵐雪
口水

鶯
雀

よー鳥や日のさー廻る夜の籠
よーきりも小野とらけし渡の中
能まーの移りし我をまきまきし

錦水
行雲
芭蕉

翡翠

河せみの初とよ藤や切蓮々
翡翠に折うけ籠の支藤う糸

葉言
西花

羽
枝
香

羽ぬけ香啼音そりそりしと時
とこらものねをそらや羽ぬけ香

其角
希因

鶯
の
巢

鶯

をうね鶯の初しり水りゆん舟う糸
鶯とそらふとく移り水をうとく行
見物の火ゆえられとる歩り鶯う糸
簾望もわら鶯はくしや川おじ
曲江小舟のそらね鶯ふ採り有
先舟の歌もかまのね鶯ふ採り有
鶯はくしひの尻舟とささるかどと糸
鶯縄むく淡まきやニエとあり
鶯数小早瀬とみゆる鶯う糸
かてまよふと面や鶯匠のう舟をうり
らもはうれ鶯烟も眠る夜明くは
あまうちの鶯とせり合ねうりあう糸

其角
雀貫
去来
李田
梅鮎
淳兒
独卜
桃隣
蘭指
琴風
氷花
尚白

水雞

膝まきくつめありふわり水鶏な
おのり糸の尾やま鶏代磯の園
岸守の宿をふひるま回らうの
あいらりもたらしく耐る水鶏
うらぬより戻りかきとる鶏
宵の口啼き曇りや鶏らひる
水札啼て日教ちろはく流る角
けりるの七神移さきとるは
らち川や雉の浮巢ふなく蛙
亀の脊ふたさうの雉の浮巢うね
鴨北巢にま菅かさきと小雨うる

土芳
本草
芭蕉
去來
半殘
北枝
一泉
尚白
其角
肅山
一椏

水札

あまの巢

蜂

螢

おのろ虫を木との螢や蜂の中と
あまの巣や吹とまきねと雉の園
簞けし朝くふる螢う有
牛筋糸まきと陸草のほる地
けりるの七神移さきとるは
桐のきあま息さしぬる螢うね
草も木も螢うるやまの音
田の畝は豆ははらひけりるうね
かましをを生れつまは螢う茶
あまの夜を下さうりけりるうね
夕園とけりるもあまや酒をやし

芭蕉
本末
嵐雪
言水
本草
史邦
正秀
万乎
猿
鴨
舎
水

編蝠

羽蟻

水辺を舟をさる是川何となく那
菽垣や卒都婆のあひを飛螢
石山へまことそ那〜きあふふ有
飛く川筋ちうふなれ螢の宗

編蝠や宇治の晒ようとうりて
たう告〜文うけけりゆと〜風
かそりや白ひの女房とちをん
婦唄や月けあころをまきふ

羽蟻とまや富士の裾野の小家より
とんでこゝと近道とるまありうね

宗因
鬼貫
嘉元
袁玄

其角
子英
芸村
曉臺

林秋
荻村

蛙

ひき
久保

子子

蚤

明松のあから樹再なくゆぬりて保
あまかへる柳を流く益もあし
あふり啼とあひあふりあぬる

ひきをふんで夜の卯は花をゆふの危
憂き耐はひまきの遠きも両夜哉

子子や流くくあらのら門とまき
ほろりりの〜や浮世のら門せ貝

蚤あふみ馬の尿をねはらうとえ
隙あまや蚤のあま行耳の穴
川越や蚤あふりうけ撲つ田川

芭蕉
其播
涼徳

其角
曾良

氷花
重厚

芭蕉
文艸
彫棠

籠

夏
廿
し

うたへの籠もかたし木音の籠
かほりはく飯粒をくはあくくまの
籠よいうる眼よ力なれ籠る麻く船
珠数くりて籠打人の斤手くひ
浦風やゆらう籠を人のまる足際
く人打その手枕の籠うりこのま
うらうきまう子の鳥は籠うこん
苦くまや益業うり行午の籠
電のまきくひ物うてや火とりひ
あふ夜はや鳥もくねろ火取虫
又まよこまうりてまねう火とり虫

犬草
翠袖
正秀

芭蕉
嵐雪
子堂
西軒
伏水
已百
紅雪
九節

蚊

蚊
柱

宵の蚊もはうくをくくハ声う籠
蚊をよけて寝の軒やほとくまを
旅人やあうのま方の蚊はゆへ
血をすけしりのとちちを蚊の傍さ
蚊の群くく梅の一本の曇ちりり
子やうんその子れぬも蚊の食人
蚊の伊せく籠のうへままりりて
糸やの蚊や御佛供焚火く出く行
蚊をころと中み蚊明く旅森くを

蚊柱も大鋸屑誘ふ夕部う有
蚊をくくも夢の涼格かくれり

其角
鬼貫
治荷
文草
小春
嵐棠
一笑
一笑
鉤雪
昌碧

宗因
其角

蚊

旅燕して香るる草の蚊をり哉
故中り木や芥子女の石知らう川
蚊を火お森ととらせまぐなりあるこ
ろ中り火や蚊をける方に志知とら
指らひー荒れ出さうりあの蚊をり
草の戸を念佛の中も中りる

去来
嵐雪
杏雨
其角
鈍子
三翁

蛞蝓

蝸牛角ふりまけよ須磨明石
枇杷の葉おをとらぬ角なき蝸牛
世おはれて踏ふみるくかとはらり
ちる露や角に目をめりくはらり
蝸牛角細く夏のせよれり那
我むらし踏はらりたるかとはらり

芭蕉
其角
友元
嵐雪
水鷗
鬼貫

蟬

撞鐘も初くゆうゆう蟬のこゑ
蟬のきふ武家の夕食ふよたり
ゆとりてよ筆捨松ふせこの声
さく蟬のその木おもす居つらね
捕もうちくゆうなりせみのあゑ
せこせや麦をらりおこここ
啞蟬のさうね梢もあは是なり
月しろふ夢えて飛々ほのこゑ
せみながやまをて眠る松の下
吹あうと風もたうらや蟬は麦
蟬なうや布織窓の昏射

芭蕉
釣雪
宗因
鬼貫
昌碧
嵐雪
杉風
正秀
可吟
如行
曉鳥

空

蝶

鹿の子

更衣

鬼灯のからをさばくや蝶のから

空せきや石の鳥居を啼捨

蝶のゆふはくくまうて衣より

目の玉をとつておろり蝶のうら

破垣やまさと鹿子のかうひ路

おとろーき角ふならきー鹿子外

鹿の子や鹿爪おまろく音鳥

一ッ脱くうーろふおねとろもか

はくろこさやうのそや花の更衣

春と夏とまさんゆきふ衣ー

鹿を見もかりのゆとろや更衣

其角

一井

旬空

卧高

曾良

柵雪

野坡

芭蕉

正式

鬼貫

宗因

音

ゆりのおろく布子賣をじとろもか

扇をの暖を兼あろーあろもか

あろもろくまろくおね罪添ー

早あろーしまろこ核か係衣ー

更衣襦もをろくやたろくまろ

てらろくーとかりまおほくよ衣ー

雲水小打地そあやあろもろく

とろもろくをろくろく屏風越ぬー

ろく入著ろくを致もろくや更衣

身をなろく将まをかりふとろもろ

綿をぬく旅席のせーとろもろ

とろり子中あろのたあゆい衣か

林園

嵐竹

その

一有

傘下

野坡

秋之坊

琴風

龜翁

且水

九派

尚白

給

鴉の野おそくわとあつせいの有
一日と花よひまきなりせうま
てらくと空一志きり給う那
給着るや十里をゆらん朝こころ
初らくと木目ええと給う昭
日おかけて黒きあやせも似合危
かこころのやねきかた給う素

青
簾

乃のささら青まふかたをさうれ奏
其の流よりもあれし青すくえ
あの日け縮妻と名せしまきとれ
さつ川きふ千尋の糸や青簾

嵐堂
鬼貫
國友
独卜
此筋
湖水
素枝

月下
吟松
丸治
希因

葵

まは
ア

今や夏の入口涼し青をくそ
まき簾くつた坊らもくまはし

呉竹のよりに葵のまりのう百
下くのやねかましも葵はつりや

松原山田舎すはつりや昼休に
園くのあふ知くちやありま山
新めてちや作るはつりの車我
午時と実盛ふなるふふう有
平ちぬら祭うりのあはひうぬ
あつりまて鬼おきりて休ふ地

桃後
支考

樽良
曉堂

角
定克
白雪
玉笑
新美
古庭

卯月

皋月

水月

あけの如き木草や四月の擡うり
 此ころの肌着身ふあむ五月うれ
 白雲のくろや四月のすく山
 山城や五月くろりの雄子のとま
 たましくあ之日月をくむ五月ころ南
 かろく身を風のせむる五月哉
 六月や風かあう五月あおれまよ
 こころ月やあうを流るる年うまれ
 むせり月や朝起しころの風ゆるま
 みなな月や朝起しころ大書院
 六月や磯おどりはく夏をころ

芭蕉 尚白 燈外 錢芷 去来 凡兆 鬼貫 素堂 杉風 惟然 怒風

夏書

夏書

灌佛

各を佛とく月のとあめ夏花うま
 春はくみや先ゆく人ま見のこ
 日次りてかそる筆の夏書は
 流るる夏去のふて社命うま

重則 言水 蕪村 兀峯

灌佛や籬手合とる紋珠の音
 灌佛やまもとくけも二年紙
 灌佛のそのとる渚しあうまね
 灌仏やとや入相乃大はとけ
 灌佛やはし並つ井戸の玉根

芭蕉 之道 尚白 百里 曲翠

新茶

葉撰

風呂

短夜

七堂小堂在之 余房や新見堂
脱捨と夏の住居や花見堂
踞つて軒をめぐりやと新見堂

起つてくる被をかきと新茶の好
起くのとと後夜宿の好茶の好

栂の戸をうのふせやとと葉撰
大藪はいつかかくとと葉撰
秋庭のそり踏ありのくととそり

夏風呂や清水寺ととかかれり
風呂の茶は夏目もらほとと細く

麥林
涼郁
分江

考逸
舎羅

嵐竹
史邦
山店

宗因
重房

短夜

夜

みよる夜やかの五文字小明石得
みよる夜は二階へよりのきり
短夜は吉次冠者に各残り
みよる夜や木賃もよるとととと
みよるよやとと白粉の香りのと
みよる夜は麻さむの里も朝露これ
短夜の声なま長馬中
みよる夜や百合咲くけり明あかり
みよる夜やとと火の里も
みよる夜や小見世明る町とと

宗因
東山

其角
惟然

一帯
千鶴

潘門
林陰

且葉
春宵

若村

蠅

昔紫と蚊とあもはるや八瀬大赤
螢こゝや 松よかやははる昆陽池
ささる 藤をまろし入れりの悔の中
蚊の声ふのうれまきしてかやととく
志は身のまゝのみ而や蚊とのは

去 素
鬼貫
車 末
曲 翠
岩 翁

幟

花あやめの海りゆかをる嵐うね
うのまじりやそや帛 孝 紙 幟
雲かよま麦の穂又えて帛のあり
左右さふ横雲こゝろおれおりのる
茶いしらの中ふまゝる感のるを

其 角
宗 因
文 鱗
百 里
芦 本

糒

糒

葺るふや 豊の糒は 國津風
上まゝのけやや糒のちとれやう
あなやうは糒とくならいゆき中
トさまの初物をやー柏ちるは
山笠のゆひあかうーやちるは龜
物こゝろ糒を切やか乳交りの
鈴りちりはあま物と糒う有
場りふふ糒あちらひくちるは我

一 鬼 貫
西 吟
路 通
蓬 西
ト ぐ
玉 芙
菴 尺
南 盛

菖蒲

湯

志平うふ入る湯次りさひくの一盃
あゝ紙下やうふのびふ蚊と迎る

荷 兮
末 山

印地

らち

子小似るる子のかさうとや平地打
かそしらの嵐を印地かからう好
羊ふるまき人のと好しや平地可

仙化
左志
溪石

競

馬

競馬埒小入月のしきみう那
人の世もかうくじけさく人言
競る持まなふとらふとこをな
唐人多一度うせうた競馬う好
けのをもえく病りの陣の斬うま

其角
山川
土芝
草土
朱紬

竹醉

日

西雲や竹も酔日の人あつち
竹うさやまのせむ茶碗酒

其角
野坡

五

月

雨

五月多や蛭蚓のしほと縞の衣
さめを雨とあつ障りめのおちえり
六月雨小沈むや紀伊の八莊司
はくそつれいたく武彦北の秋徳
五月雨と堤やまきと天の川
さみまの何を業平汲渡の人
五月雨小柳まのすれ灯る系
牛もかきし羽のあつら此五月雨
海山よまきみくれそつや一とらみ
かほぬら小田子のりそつや九月雨
め日西や桂目成虫を市の家

芭蕉
嵐雪
鬼貫
去来
宗因
望一
鞭石
龍
龍
九飛
其角
松芳

五月雨の夕や淀川大井川
頭をさけて馬もあやむや五月雨
はみよね又持めりうらなをこころぬ

挑階
荊口
里東

入梅

虎々

夕立のかしら入る梅はりのう
宮崎や岩とて雲を入梅あうり
双六の相子喰ひこむはりのか
桐亀狩夜中ぬを起まはり我
松風や入梅ふりの日の夏曇
虎の袖をさよあまきつ降る浪
降りの中ぬら死なや虎の雨

丈草
養法
胡及
銭生
文元
鬼責
声

五月

夏の日

日

夏

月

五月雨の夕や淀川大井川
頭をさけて馬もあやむや五月雨
はみよね又持めりうらなをこころぬ
夏の日はぬき余のりやう
なみの日やすく死くよみうら
る夏日をまきとも海田のよのま
蜻蛉やとうねふ夢をたるの月
明くのか家お伏見や夏の月
たるの夜や東のかうり月を西
城下や笛きくそめくす川の月
たあれは酒もさるる夏は月

舟泉
榊志
掛下
嵐雪
文里
鬼貫
芭蕉
宗因
露白
挑階

夏

野

かみ
山

火串

馬はくし我と終ふる夏地を
 粘るも麦をうしむ交野を菊
 揃るも春や夏地のまじりくも
 りつもの荒さく望きし夏野を
 分の山やうも井おほたる誓の類
 花をいむけふ夏山の紫く梅
 なつらまを産み是の花屏風を
 雲雀啼くあま物とこし夏の山
 うの母木の鬼みおそれとてり角
 照射るも念佛の上を誘ひまじり
 銀小軒やかわをせりやば

芭蕉
 生林
 元灌
 史邦
 支考
 鬼号
 宗因
 卧高
 牛角
 秋風
 露宿

やま
うち

田植

投らまじりうき命や梁の黠
 目通りののをうの榎や桑さうい
 牛舌うは声もろろき田植うみ
 渺くと尻尻るうう田植うみ
 核なりのふせりあうりし田植我
 昔警やせうんまうしる田植唄
 体くくと苗をのまめらる田植うみ
 露の多ふ小亀おさへる田う急我
 山吹も巴もあまう田う急う那
 菅をまのちを脛よりそ田植唄
 白るもけ声も尾のある田植唄
 風流のをしめや奥の田植唄

此筋
 其角
 膏車
 曲水
 丈草
 正秀
 示峰
 立竺
 許六
 吟吟
 鬼貫
 芭蕉

早乙女

早乙女よかへく取うる菜飯うそ
志はくも早乙女くろふ津田うぬ
早乙女の手てせくりのよ川は支
明る戸や早乙女ぬゆる其隣

嵐雪
景道
彫棠
百里

早苗

西う東うまの早苗も風は音
菩薩とらうくくやたの梅り苗
燕の下腹さうはささくこの那
ゆふのや柄まきまなる早苗多
ふとる身の植おられく早苗多
順れう棒入けり早苗うち
こらうく雲の谷の早苗くれ

芭蕉
乙刈
胡布
冬市
魚白
琴風
紅糸

青田

里の子う燕舞るさるへこの有
親は日の寺へ助う係早苗うぬ
谷風や青田を廻る菴の客
畔豆もまも小畑の青田うな
ぬれ髪流あうまよ門の青田う形
ゑ氣啼てめともまらあるま田代
疎くまや八人代の田はあをみ
橋の小さ高の峰も青田うな

支考
臥菖
犬草
楚舟
汀鶴
桃隣
荒雀
知足

田草

はき橋や田草もらるぬくろ水
田のくまよおろれくく富士諸

山店
奚魚

扇子

扇

務合の十二の骨のあつたの那
まをまひふ旅の跡をふら扇うれ
さうはまふ扇火うけてまじ様一
ゆつてまを饅頭おのきゆめき我
扇折子ふまふまふまき化粧うま
小夜あけと肌のほめと死扇うね

守武 宗因 大仰 草士 尚白 泉門 宗因 来山 其角 左志 一峰

紙帳

帷子

祇園會

夜にや 露入 紙帳小 風吹入 春
夜にや 露入 紙帳小 風吹入 春
あひふこと 糸帳小 白と送り多し

其角 貞長 野徑

かこむらの四五六月のまらみう有
帷子ふあうはりのまら日出う那
うこゆや 佐保と 龍田の 留北 粧

宗鑑 大草 青娥

祇園會の山路ふ入るや 大付を
まらんとしや 山ふ木はある 祇園の會
祇園會や 林のまらゆき手向ふ
立白もともよ 踊るや まきとんの會

宗因 梅盛 如貞 嵐

氷室

水の奥氷室よりわが柳の那
ちりほめて千年あねる氷室山
ありくさや家ふ冷水氷りち
湖や暑ををくむものみ松
雲の峯かたや嵐くくくくも
夕々終や元くくくく雲の嶺
くもの峯空ふくくくくはたね
柴刈くくくくくくくくくく
雲の峯腰くくくくくくくく
雨乞小先くくくくくくくく
あま乞や近江とくくくくく

芭蕉
貞室
溪石
鬼貫
去来
桐雨
明水
野
犬草
乙刈

雲の峰

雨乞

昼寐

土用

虫
子

山人の昼寐を志す葛のほら
かたひくの洗濯まうくくく寐うれ
さてくくく額あきゆる昼寐うね

白雲の天北原草土用く那
寒晒く土用の中炊はうりか奈

捨人や木草にかきて土用子
のりかた時代く達や土用やし
らほり香や虫子もせくくくく
内張の鏡はめくくく土用母く
虫けくくくくくくくくくく

挑妖
昨非
了仰

望一
許六

其角
杉風
トク
理性軒
肅

暑

あつき日次海ふ入りの取上川
 焼豆腐うまくてあつき夕日うね
 草の二葉あつうらねあつさう那
 とは庭の砂あつさぬあつさう素
 志終んこの藪あつ風をあつさうし
 かんとうあつ暑りと石の塵とあつ
 照付てあつりもあつさう海のうへ
 毒もあり子もあつ宿のあつさ我
 屋とあつあつ蚕とあつ臭のあつさね
 元山はあつらあつらぬあつさ水
 粉あつねねあつもあるの暑この素
 馬の目あつあつあつもある暑この素

芭蕉 宗因 去来 荷兮 野童 鬼貫 嵐雪 氷花 許六 猿 里東 牧童

あつさう雀足あつあつあつさう那
 田の草あつさうあつさうあつさ我
 蝉あつさうあつさうあつさうあつ
 年あつさうあつ田の稲あつさうあつ
 並松をあつさうあつさうあつさうあつ
 草のうやあつさうあつさうあつさうあつ
 名草の内あつさうあつさうあつさうあつ
 積あつさうあつさうあつさうあつさうあつ
 日あつ朝露あつさうあつさうあつさうあつ
 空あつさうあつさうあつさうあつさうあつ
 村西の木あつさうあつさうあつさうあつ
 あつさうあつさうあつさうあつさうあつ

逢望 之道 採志 溪石 卧高 我奉 乙刈 卓袋 蓬船 行香 其角 素堂

夕立

夕立の雲もかゝらんとて空
白雨や障子かけしぬれし
夕立にわらわの月や松の上
夕立にわらわの外をるとんまうお
夕立にわらわの垣穂の那
夕立にわらわの路や堺うら
夕立にわらわの村々を
夕立にわらわの鎌田を
夕立にわらわの山田を
夕立にわらわの牛の門を
夕立にわらわの梅の奥を

去来 鬼貫 嵐雪 大竹 其角 傘下 愚我 隨友 仙化 山川 沾蓬 荆白

簞

竹奴人

白雨のふりけはあつ山田上
夕立は跡をて廻る山田かな
夕立は梅の奥の山田かな
夕立は梅の奥の山田かな
夕立は梅の奥の山田かな
夕立は梅の奥の山田かな
夕立は梅の奥の山田かな
夕立は梅の奥の山田かな

抱きかかちて寝かへてきりぎりす
抱きかかちて寝かへてきりぎりす
抱きかかちて寝かへてきりぎりす
抱きかかちて寝かへてきりぎりす
抱きかかちて寝かへてきりぎりす
抱きかかちて寝かへてきりぎりす
抱きかかちて寝かへてきりぎりす
抱きかかちて寝かへてきりぎりす

昌房 子祐 李下 以肩 宗因 其角 卯七 其角

涼

破風くらり日影やうらぐれ夕涼
涼きふ榎もゆらぬ未蔭るさ
ささしして涼し宿の這入くら
えふ夜涼とまりにたつみ涼なる
かけ涼し松葉きりて落日和
ちよぬ人と謡岡谷ささみかる
犬お遊む穴追ふ秋のささみ哉
とさしこのかきうらや夜半け色
翠簾うらして維妻なまの涼し舟
水と羽と合せ行勢や夕ささみ
小笠風小山里ささし腹の上
おれおれの人お進まり夕ささみ

芭蕉
玄旨
荷兮
去来
宗因
鬼貫
嵐雪
貞室
秋色
沾徳
犬草
水風

風

とさしきや櫓の中ゆらぐ夕涼
涼しは風口をれてめと海川辺く船
桃燈のととからゆりささみさ
船涼し勢ふかきまじと沖へゆく
船涼し櫓よりのささ茶の白ひ
我舟と涼むままかり涼し守り
洋や魂なうとを川ささみ
とさしきや帆は船はちらし髪
琴ひりて老をかませよ夕すさ
早ゆかたれ合夜そ朝露夕ささ
とさしきやうらぐれ夕涼とあり
涼しはやうらぐれ夕涼の口れ砂

俊似
未學
卜枝
秋風
巴山
柴帯
其角
智月
支考
里東
句空

風薰

打水

このあつり二三日のしほすくさぬ
ともさねお木城さくしや風の音
かまひらの脊中ふくはく涼みう那
まり那も尻吹吹くさすみみお
故屋を出く窓一度吹ひ戸に我
まきしきや物いあ声ま瓜の小玉
はく浪や風の薫りの相いあし
目小耳もあふくね風はかきりうぬ
帆をかふる颯のはくさや風薫る
うち水おのこねさくみや梅乃中
あつりやさくの垣穂ふ夏の月

野 磯
山 川
衛 門
一 笑
土 芳
鉤 壺
芭 蕉
鬼 貫
其 角
丈 草
卓 袋

心太

菜瓜

心をや紙園とやいふひらさし
血舞ふ駒のワあけやさうてん
多門のらちん呼せんとうろてん
柳らと片荷と涼いとくま菜
児のまね玉あもあゆるま菜うさ
白くくもふき味がーまら瓜
まら瓜てま菜もみえぬ暑哉
茶けらりけまを洗々や真菜瓜

宗 因
其 角
序 令

芭 蕉
嵐 雪
鬼 貫
去 来
正 秀

沖鱈

酢徒利の水さあやちを沖鱈
沖鱈ふれとりのていさねよー

ル 董
曉 臺

清

有

心太

城めとや古井の清水まの洞人
 援よりあめ後清の斤草鞋
 ちぬくひの平下もあふぬあまのうれ
 六玉川高野の外外清あまの
 とみまりて塩子の沖は清水哉
 帷子ハ浴堂あてゆゑあまのうれ
 直垂をぬくあまのうれあまのうれ
 連あまのうれあまのうれあまのうれ
 松風ハ巻の斤は清水の角
 我跡ハ缺層はあまのうれあまのうれ
 山陰やあまのうれあまのうれ
 海みこえてあまのうれあまのうれ

芭蕉
 嵐雪
 宗因
 去来
 俊似
 尚白
 一文
 道
 許六
 卯七
 嵐水

晒井

汗拭

旅人の足あとよめる清あまのうれ
 あんあくの跡は清水のあまのうれ
 此夏の撮はあまのうれあまのうれ
 落合とくき形なるりし清水あまのうれ
 けしし井や底より寒い人の声
 ききしめや涼世ハあまのうれあまのうれ
 きらら井や男あまのうれあまのうれ
 尋常の和巾あまのうれあまのうれ
 扇折いりあまのうれあまのうれ
 生の松ゆりあまのうれあまのうれ

仙化
 其角
 泊徒
 蕪村
 桐雨
 嵐雪
 汗々
 嵐雪
 千那
 其角

夏瘦

夏やせふ能因考くも小食より
なつ瘦と云とる人と云とるを
多門やせやと云唐士の半妃と云

其角 夙子 友静

川狩

川狩や主のらうはよ手柄とる
川よりやあそび木蔭お立涼之

我峯 愚心

秋近

秋のいときまよ小秋近一故とんか
能かへはとんはの多も秋らし

此筋 凉帝

不二詣

あふ雪小思き若流に富士詣
角帽子雪玉凋むやあ詣
武士より川越とらふ富士まらう

其角 素堂 翠

後被

人並の端をも越きり御被川
夏よりい目の行方や波踏島
破と扇一度小流を御被り有
吹陣の合羽よそよとそれ川
らふ女まはし豆腐とらまは被川

宗因 嵐雪 末学 其角 琴風

井

盆

卯の花中夏摺寄しそ川御山
うねと形よそとまを御起森起
弁のそらと隣あそびやわれ嵐
卯は花中雨のあつらは皆の蹴
うのそらと水のりこて体曇うれ
卯は花のそらと持たさつら毎の垣
うのそらと月のらうとを窓明と

去来 杖風 之道 楚舟 支考 土芳 野坡

若葉

あつた西のほろろね柘植の若葉我
心より定しと若葉の平云はめきやけ
ひとしきれ榎もろろねくろそか那
よあつたをりて若葉はあつたを
おひひこめてみるべきをの若葉我
若葉あふく風やあつたを此刻よ
非情あも毛泳ぎ枇杷の若葉我
まろろろを我の若葉の若葉をえん
きり株の若葉あつたをねくろそ
若葉あつたをろろねあつたを木う那
若葉あつたを若葉の若葉の若葉う那

素堂 其角 楚舟 定良 宗因 嵐雪 鬼貫 敬兩 不交 藤花 荷心

若楓

若櫻

若櫻

借心の青ねおとやろろかろく
物食の若葉はあつたをろろね
馬ゆあつたを折くやわろかて
さろろねお針事ろろねわろ楓

乗はろろねお田ろろねあつたを
あつたをろろ散のろろねあつたを
ろろあつたをろろあつたをろろね
さろろねあつたを暖らん若の山
山櫻實あつたをろろあつたをろろ

其角 嵐竹 卓袋 兎筭

鬼貫 沽荷 蝶羽

一鉄 耶棠

茂

嵐山藪の茂りや嵐ねとち
川草のふまさら白み茂りかな
神くくと春日あけてはくらぬ
ちけりゆく草津の境や緑の晴
光こゆふ一つの山れまきりこの那
花のあると今朝の宿をとの茂て我

夏木立

よりののし椎の木もあり夏木立
にそだの本社といつらなる木立
鷺の明は浅黄小吹くや夏木立
夏木よらとささ木はくく猿の声
蜘蛛の巣のあつきりのかき夏木立

下園

源慶寺小種ね留きく木下園
夏雨木木の下園結糸帳の糸
下園や牛は御前と腹くら

青嵐

うき雲や左右小別まで青嵐
麻路巾吹落しきりまあじ
色とくもさうりうう好あを嵐
雨をねて松の白ひや音あらし
折あを破風の光りやあを嵐

常盤木

松風の落葉より水の音をじ
夏くくふ常盤木あめつても常盤木

芭蕉

嵐雪

鬼貫

宗因

去来

子珊

芭蕉

昌維

希因

安枝

鬼貫

芭蕉

嵐雪

百里

史邦

巴流

嵐雪

支流

百里

芭蕉

貞室

桐の花

かみまりののなるて是よりし桐の花
桐の花青をしらんせせとの花の
舞こころ大工はつひやまりの花
此うちの障子南やまりの花を
茂る木の中ふかり西一桐の花

花袖

袖の花は昔ちりめん料理の写
ゆはあやや産入りりるついであり
行ふもろはへ花袖とあるひと
袖の花よ仇名あり酔いりり
蓋とれた蚊の花井戸や夏折
脱とめて風ははかりりる折

夏折

史邦
猿籠
因友
子兼
トシ

芭蕉
彫棠
言水
佑徳

一煎
涼体

青梅

青梅や木のれう空そあ茂る味まき
青もあや乳母うま妻のよかとし
あを梅やそまよりりれり寄飛

岩泉
幽光
入松

標

標佩てまきとめうりやちは者
干物のしりりあつしやうま標
らまきまやあちのまきまきの声
温飢打とるりあちりりあちち我
水すさかちりり標のまきまきの

嵐雪
白雪
因友
素寛
平吉

栗花

世の人はうらけぬるおや郵の栗
湖花なまきはまらる栗花を

芭蕉
用弾

合歡

衆深や西越々橋本のを指
合歡の本はねらるるをわすむ清き哉

芭蕉
仙花

覆

盆子

枝橋や付ふるさうのいちと
手の跡を忘れず甲斐のいちと耐
鼻紙のま覆を盆子中降るる益赤哉
水うれは隙とよりまぐらちとう角
井の底は蛇と忘れず蔓のいちと

重則
陣由
朱由
杜池
山川

ちあう
ねむ

古寺や傍さぬめうと被摺の巻
掃まのうたひ日和とちあうねむ

三園
度江

柿の巻

百日紅

此中の古木のつれなきのこ那
柿は花蟻のちくちくとそうはり
さうねうとも花あはあうね百日紅
あひつともや百日紅の教の日まで

此筋
可廻
其角
支考

燕

花子

杜若もねむ祭台はあひあり
そねはつと蛇のゆくやかまうら
母と死ねばなれをしくよ杜若
獨きあり手はうらせんかた門を
植たりるうぬ研さきさ燕子花
吾もるは下よちく形りうらうら

芭蕉
大草
嵐聖
周也
桃西
成之

牡丹

密うらぬ花や牡丹のちねの蜜
土嘗くそふかひうほう牡丹うな
我う身の細くまりうやほん畑
笑あがりあふんまき紅牡丹
蟻獨もあふりかへるあふん畑
下先のほん畑うらまう素
牡丹ふふうらまうとよれ唐余哉
頭刺る袖とそふかきあふん畑
藤の起川牡丹のはなみひくそ
淮宿そ穴明きあふん紅あふん

牡丹

牡丹のちねの蜜
牡丹のちねの蜜
牡丹のちねの蜜
牡丹のちねの蜜
牡丹のちねの蜜
牡丹のちねの蜜
牡丹のちねの蜜
牡丹のちねの蜜
牡丹のちねの蜜
牡丹のちねの蜜

芭蕉
嵐雪
鬼貫
一井
許六
踏徒
挑隣
猿雖
瀟波
毛紈

芍薬

芍薬も紅とりの紅とあふん畑
才陰もあふん芍薬のちねう畑
才の穂や芍薬埋む里のせと

紫紅
有也
自笑

葵

刺うけの葵とあふん鳥帽子う畑
野草あふん葵のちねう畑
あも瘦てあふん葵のちねう畑
蜜えー兩牡丹葵やあふん畑

魯丁
岩泉
荷兮
仙化

苔の花

軽け卵あふん苔の花あふん畑
とろせきと跡で咲きあふん畑

野坡
希因

芥子

白芥子や附西の花は咲けり人
 給あせむまへけりのひとをある
 秘奈の一下濱留守を芥子の花
 芥子散と直小実をみる夕方那
 ちるさひ井児を拾ひぬけりの花
 人のさと散るとをわね芥子け花
 咲るちるさひのまほきけりの畠我
 まさちるさ馬蹴母とみるさの林子
 大粒を両ふとさへけりのさ那
 のく風との世ふまきわのささりのさ
 京出とく泊りよとや芥子け花
 青くまき白ひもあじけり乃花

芭蕉
 来山
 去来
 李桃
 吉次
 洋水
 傘下
 大草
 東巡
 支考
 里東
 嵐蘭

あまみ

竹子

新のさね裾まうじかり旅とらも
 かりけりまきをみけりしむせとる新
 竹の子や雪隠おすて嗟哉の坊
 筆やかり藤の床はとみよりのも
 あま月の竹の子うれり竹生時
 子おはれてるまもや去来の竹
 垣根と一竹の子覗く既この那
 竹の子や境目もあふとを二葉生
 さひの子おちるさひを流したとみまき
 筍のちうらけまきけりあふりか南
 下りあふり竹の子盗むあふりか

嵐雪
 風聯
 嵐雪
 鬼貫
 去来
 大草
 全峯
 智丹
 九兆
 猿躰
 玄梅

蔞

のりまきして蔞の葉ありのおふくても
草外やふきの葉ありの蔞又いらに
子小あまうといふ迹込ふき蔞の

里東
波村
乙洲

茄子

菅のまきと青紫まうらやまきと汁
赤味ゆかぬれまきりま初茄子
一本の茄子もあま味とまひうの
神味ゆか蔞もひとらまけかま

芭蕉
北枝
杏西
園友

藜

元とりのせん藜の杖よけり日まき
元政の軒かこうふあさるころ月

芭蕉
西霍

紅の巻

紅の巻も海のかまきりや朝結身
半あねま枝ころりやるふの花

去ま

夏菜

蠅かろくろ一枝どらんかみのまき
夏菜やうまの巻の巻の巻の巻
即ちりまき法除のまきまの巻
かまきりまうれも西あめまき

其前
拙候
せんま
旭芳

撫子

あてまきや着法まきまきまら
撫子ふゆんとまきまき川あうり
なてま子のまきまきまきまき

越人
嵐南
猿跡

百合

花をゆれどかく浮世とくろくま百合
姫ゆりやうくよりたりゆゆの心聖
餘りの箱ふさいり百合のそね
さみさねふむおなたしゆりれそ
草ゆりや百合と中く者の教

後河路やうね橋も茶の白ひ
夏を海を橋てとちそねの起しりそ
たちそねやゆりの柱ととくえん
橋やあさふおちとゆそねの糞
あけりのと橋らち一旅とと

宗因 素彩 嵐雪 破釜 半残 芭蕉 鬼貫 木因 桃隣 我奉

橋

昼顔

ひるのあやみ橋流石あつたまり
夏教よひとまきよ一後者の跡
あつたまりや夏山伏の半半はさひ
夏うねやさよに刈りゆきまをさけ
枯柴よ昼うね暑一足のすそあ
ひるの月や口の星れとも花はくり
夏うねや風のそとやまのつゆと

藻のそねをかんてる蜜のせせり
夏藻てる湖水ゆらまきや夜の山
潮引く藻のそねあつた暑り那
藻はとまのそまねくや池の上

芭蕉 野坡 交考 桃隣 斜嶺 石圃 嵐蘭

胡及 秋風 児竹 桃隣

藻の

櫻麻

笑ぬきて中やうらうらんと麻
行ぬけの家やうらや櫻雨さ
三日有はらうら出て居るはらう麻
いふ井てははらふらうらん様あさ
誰あけは斬るうらんさうら麻

青亞
一矣
嵐竹
杜格
普人

紫

陽

紫陽花やかこむる耐の落沙斐
あちまの五器よりうらや叶枯
紫陽花やうの目久一の馬口とら
あちまのうらうらあき扉う有
青くえんまもあちまの巻杜あ
紫陽花やあちまのうらうら空の久

芭蕉
嵐雪
梅扇
伯之
為松
希因

萱

あ

免

甘くてまて人の毒あまてまれ叶
住み誰の家は花まて草草草
あちまの情や五天のあやあま
あちまの時もあや免あまあけり
あちまの尾の長をくまあやあま
あちまの耐を根をくまあ草蒲くま
あやあまを斬る人あまのほりて我
五日すうてあまあまあまあま
馬あまを侍まはしあまあやあ
にあれのあやあまあまあま

末山
燈外
芭蕉
鬼貫
嵐雪
如泉
荷兮
桃隣
仙化
子珊

顔

萱

夕うほや秋のいろくの飄一の有
ゆうほなるちまの伎也虚目哉
夕顔や名をとおとくするむの形
ゆうほの志をむ人の志うねん
夕白のや香ゆく中とのまふふあも
山崎まを夕うほえくる井中う那
夕うほや一穂のこほ夏豆腐
ゆうほや一穂のこほ夏豆腐の中と
夕うほの遠せ所ふあまりきり
ゆうほのむれ初えの気や油麦
夕顔やあよりとえれい炭とら

芭蕉 宗因 去来 野水 大町 市柳 許六 甚角 堤亭 詩六 杉

萍

河骨

蓴菜

萍の實もりまきよーあうゆや
鯉とんで萍のむねらせふきり
うきこらや露なうと川まきみ
菰突く控うきまきの篠みうく
泥亀やまらまきまのまらあ

嵐雪 つゆ女 柴栗 知足 蝶羽

河骨や終ふひらうね花はうら
川にゆゆや梅も周めは夜半 床
かのは後の二本うくや西の中

素堂 嵐雪 蕪村

蓴菜の名は人あつものあつれり
蓴菜のさぬやあるより繁る水こころ

万子 木底

蓮

さうくと蓮さうとくといけの亀
 浦舟の頭をりし句ををらさう
 痛くうと人蓮ふ流ふ朝海けけ
 ひく起やむくくく蓮散らさ
 蓮の花ちるや八岳のこころれ
 客あるし世ふ蓮の地追り人
 ちとの香や田の社有る水の跡
 蓮見ん日本月代をりあさとも
 鮎の子て蓮ふらふことあさ
 吹散りてあの人かをあさか
 笠とまてみなく蓮ふあさか

鬼貫
 本草
 其角
 玄梅
 史邦
 良品
 沾徳
 晨風
 自悦
 正秀
 古梵

蓮葉

浮ふ葉を葉此蓮の風情さうん
 とさとのあやふみとまきあま
 浮葉のあつりまきさるあつさう好
 中庭をよあもさう細く笑あさり
 おもさうや千任の片端え知こし

素堂
 白雪
 嵐雪
 鬼貫
 朝使

沢原

あめをねふあつりさの留りう好
 蘭は花や涙ふよとあさ骨の雨

此筋
 鈍可

蘭の花

蓮葉列

鴨の子や依あふ入ましまさも列
 そのまおくけしきそ沈み列まも

邑姿
 且葉

宗因
仲

林檎

善竹の背りつきてうらねのえん
 登瀛や若竹そよく山はくも
 下えふととけあき竹のえんあうね
 善竹や西追ふ風はそとをうと
 ころ竹や水の中でのそよくき合
 ころ竹の香ふあうとくは鱸う系
 善竹のうらあみあうと雀う那
 こくくや涼しき声や七ッ器
 多ふとあもあんと油ておもふし
 ゆうしきも知のあきき林檎う那

宗因
草

仙花

路徑

和泉

百里

龜洞

車耒

其角

百里

通夏氏

